

学位請求論文審査要旨

報告番号 甲 第 号

氏名 常深 新平

論文題目 『メルロ＝ポンティにおける芸術を介した人間形成論』

審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員

修士（教育学） 眞壁 宏幹

副査 慶應義塾大学文学部准教授

博士（教育学） 渡邊 福太郎

副査 東京電機大学特定教授

修士（哲学） 本郷 均

I 概要

本学位請求論文は、フランスの現象学者モーリス・メルロ＝ポンティ（Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961）のテキストを人間形成論として哲学史的・教育学説史的・理論的に再構成することで、絵を見ることが人間の知覚経験をいかに変容させるのかを明らかにし、芸術教育の基礎を論じようとしたものである。メルロ＝ポンティの現象学的哲学は、世界の情報獲得や単なる受動的学習には還元できない、経験主体それ自体の変容プロセスを考察している点で、感性学の復権を目指す美学の動向や経験における身体性を重視する1980年代以降のドイツ人間形成論（Bildungstheorie）に大きな影響を与えた。本論文は、このメルロ＝ポンティの哲学を「芸術を介した人間形成論」と解釈し芸術教育の基礎論を築こうとした研究である。

II 構成と内容

本学位請求論文は三部構成になっている。目次は以下の通りである。

序章

第1節 問題の設定——なぜ「芸術」に着目するのか

第2節 研究視座の設定——なぜメルロ＝ポンティなのか、人間形成論なのか

第3節 研究方法の設定——メルロ＝ポンティをどのように読むのか

第4節 本論文の目的と構成

第1部：人間形成論の受容と形成

第1章 メルロ＝ポンティを人間形成論として読むために

第1節 ドイツの人間形成論の伝統

第2節 メルロ＝ポンティが受容した人間形成論

第3節 メルロ＝ポンティを受容した戦後ドイツの人間形成論

第2章 ドイツ観念論の継承——カントからヘーゲルへ

第1節 主知主義的なカント解釈への批判

第2節 学習経験を可能にする〈自然〉

第3節 学習経験を生じせしめる身体

第3章 改訂されたヘーゲル主義

第1節 二つのヘーゲル像

第2節 コジェーヴのヘーゲル解釈への反対

第3節 イポリットに依って立つ弁証法概念の解釈

第4節 歴史の天使とザリガニ——ベンヤミンとの近さと遠さ

第2部：絵画芸術の存在論

第4章 「知性の理念」の基礎としての「感性的理念」

第1節 感性的理念の特徴

第2節 インクビンによる「身体化された実践」への区別

第3節 「身体化された実践」への区別の困難さ

第4節 感性的理念に基づく知性の理念の創造

第5章 絵画表現における真理と歴史——「間接的言語と沈黙の声」と『眼と精神』をつなぐ

第1節 真理と存在に開かれた「表現」

第2節 『眼と精神』における絵画表現の歴史性

第3節 「間接的言語と沈黙の声」を読むために

第6章 絵画表現の制度化

第1節 表現としての絵画と数学

第2節 幾何学の三重のStiftung

第3節 絵画表現の「三重の取り上げ直し」

第7章 絵画表現の価値論

第1節 行為一般における規範性とその価値

第2節 さまざまな表現形式がもつ固有の規範性

第3節 絵画作品に対する社会のなかでの価値判断

第8章 絵画芸術の制度論——メルロ＝ポンティのアクチュアリティに向けて

第1節 芸術の制度論

第2節 絵画表現という制度——三つの産出的機能

第3節 絵画芸術という制度——絵画作品の芸術的価値

第4節 絵画芸術という制度へ参与するために
第3部：絵画芸術を介した人間形成
第9章 描写のための疎外と回帰——セザンヌを読む、教育をする、中西夏之
第1節 メルロ＝ポンティにおける芸術家の人間形成（Bildung）
第2節 中西夏之の画業と疎外
第3節 中西夏之の自己内省
第10章 描写のなかの思考
第1節 没入的対処（absorbed coping）と思考との関わり
第2節 没入的な絵画制作に関わる三つの条件
第3節 絵画制作が達成される際の思考のあり様
補論 芸術を介した人間形成へ——OBL実践を手がかりに
第1節 芸術を介したOBL実践の概要
第2節 芸術を介したOBLの方法と想定されるその目的
第3節 芸術作品を介したOBLで作用する規範性とその意義
第4節 芸術作品を介したOBLで誰がどのように人間形成されうるか
第5節 芸術作品を介したOBLは何のため？
終章
第1節 本論文の総括
第2節 本論文の成果
第3節 今後の課題と展望
初出一覧
文献一覧

第1部では、メルロ＝ポンティのテキストを「芸術を介した人間形成論」として再構成が可能であること、とりわけドイツ観念論に対するメルロ＝ポンティの解釈を通して、ドイツ人間形成論の枠組みでメルロ＝ポンティのテキストが読解されうるものであることを、哲学的・教育学説史的に論じている。第1章では、メルロ＝ポンティのテキストがドイツの人間形成論の伝統と親和性をもち、それゆえ現代ドイツで人間形成論の枠組みで逆輸入されるに至っていることが示される。すなわち、ドイツ人間形成論が依拠するドイツ観念論の経験主体の変容というテーマを、メルロ＝ポンティが取り入れ、理論形成を行なったからであるとされる。ドイツ観念論の受容を介して間接的にドイツの人間形成論を受容していたと言える。第2章では、シェリングやヘーゲルが注目したカントの概念である「知的直観」や「直観的悟性」に対するメルロ＝ポンティの解釈に注目することで、身体を起点に経験変容を語ろうとしていたことが明らかにされる。第3章では、さらに、メルロ＝ポンティの独自のヘーゲル受容に焦点があてられる。メルロ＝ポンティによって改

訂されたヘーゲル主義が、人間の経験と存在様態の変容に対する関心を基礎にあることが明らかにされる。メルロ＝ポンティによれば、ある学問や表現形式における認識の生成は、事後的に合理的な連鎖として判明する歴史的構造やある種の必然性をもち、人はこれを「～すべき」である、あるいは「～した方が良い」という促しとして身体レベルで応答するのである。以上から、メルロ＝ポンティが、ドイツ観念論（とくにヘーゲル）を独特な形で受容することで「人間形成論〔Bildungstheorie〕」の文脈に正当に位置づけられることが論証される。

第2部では、メルロ＝ポンティのテキストを「芸術を介した」人間形成論として再構成し、その内実が明らかにされる。とりわけ絵画表現が知覚経験をどのように変容させるのか、制作の際に絵画制作者が辿らねばならないプロセスをどのようにメルロ＝ポンティが考えていたのかが内在的解釈によって明らかにされる。第4章では、メルロ＝ポンティが「感性的理念」という概念のもとで、絵画表現、文学、数学といった表現形式のいずれもが人間の歴史的・文化的意味を生じさせる身体化された実践であり、知的成果を創り出していく営みとして考えられていることが明らかにされる。第5章では、絵画表現、文学、数学といったさまざまな表現形式が、それぞれの表現形式に基づき知的成果が創造される際、いずれも「感性的理念」に関わるという点で比較可能であるのみならず、それぞれのしかたで世界の真理を体現するという点でも等価性をもつ、とメルロ＝ポンティが考えていることが確認される。さらに、第6章以降で詳細に検討される、メルロ＝ポンティの論考「間接的言語と沈黙の声」を読む枠組みを整えるため、以下のような仮説が提示される。「間接的言語と沈黙の声」では、その前半では言語表現および絵画表現一般がもつ制度的な構造はいかなるものかが、その後半ではその制度の産物（作品）のうち社会に受け入れられたものがどのようにして価値をもつ芸術作品となるのかが探究されている、という仮説である。第6章では、まず、「間接的言語と沈黙の声」の前半で扱われていると想定された問題が考察され、メルロ＝ポンティが、絵画表現も、フッサールが述べる幾何学における理論展開の内的構造（三重のStiftung）に非常に類似した内的構造（「三重の取り上げ直し」）を伴う歴史的展開を示すと考えていたこと、すなわち、絵画表現も幾何学における理論展開と同じような内的必然性をもった歴史的展開をもつと考えていたことが示される。第7章では「間接的言語と沈黙の声」の後半で検討されていると想定されたこと、すなわち、絵画表現という制度の産物（絵画作品）のうち社会において価値ありと判断される芸術作品がどのように成立するのかが考察され、絵画表現が固有の規範性をもち、後発の行為を「統辞法や論理学と同じ程度」に規定するものであること、しかしながら、絵画作品へ価値判断が下され芸術作品が成立する際には、数学などと異なり、偶然的な社会状況、他の行為領域の規範性からの影響を被りやすい表現形式であるとメルロ＝ポンティが考えていたことが論じられる。第8章では、この絵画論を、現代の英米圏で議論されている制度として芸術を定義する試みの文脈で読解することが試みられ、「間接的言語と沈黙の声」に潜む芸術に対する制度論的定義を抽出することがなされる。その結果、

メルロ＝ポンティにおける絵画表現論は、第一に、絵画表現の制度的なあり方は数理と並置されるレベルでの非常に強い歴史的必然性をもつとしている点、第二に、絵画芸術の制度的なあり方は、多くの人に開かれたものでありながら、それに適切に関わるには高度な学習を要求すると考えている点が特徴的であることが明らかにされる。

第3部では、人が芸術家に自らを形成していく過程を、メルロ＝ポンティがどのように説明していたのか、ないしは説明しうる理論構造をもっているのかを探る部分になっている。第9章では、メルロ＝ポンティの講義録（「文学」講義と「子どもの対人関係」講義）から、芸術に従事する芸術家（とりわけ文学者）の人間形成過程がまとめられ、芸術家を志す人間は、自己像と他者から見られた像との間で差異・隔たりを強く意識し世界からの疎外を経験するが、その後、その経験が、ある表現形式を介することで己の感情と表現形式自体についての徹底的自己内省へと進展し、そのことによって世界への回帰を果たす。次に、このような芸術家に成るプロセスに関するメルロ＝ポンティの分析枠組みを使って、戦後日本の現代美術を牽引した画家である中西夏之が一つの事例として考察され、画家へ成っていくためには、画家としての知覚と思考の継続、とくに、画家としての自身の知覚・身体性・生き方への自己内省に加え、絵画表現という表現形式自体を問いかける反省が鍵となっていたことが明らかにされる。第10章では、第9章で判明した、画家の人間形成の鍵となる、自己内省を伴う画家独自の思考に関して、メルロ＝ポンティのさまざまな芸術論に基づき考察が展開される。絵画制作の場面では、明確な言表可能な意図を伴うことのない「没入的対処」と呼ばれるような状態で絵が描かれることがあるが、こうした没入的に専門知を発揮し絵画を制作し、画家に成っていくとき、メルロ＝ポンティの絵画論では、以下「三つの思考」が描写の只中で関わりと説明されることが推定される。すなわち、まず(1) 意図を伴った心的状態としての思考が、何らかの「主体の現在の課題」を遂行するため「特殊な周囲環境」へと身を置くことへ関わる。次に(2) 注意を伴った心的状態としての思考が、線や色の選択などの「主体の現在の課題」に関わる行為に影響を与え、「主体の運動スキル」の発揮に関わる。最後に(3) 判断・反省・解釈といった推論的な心的状態としての思考が、「主体がもつ運動スキル」の把握・正当化、今後の「主体の現在の課題」の設定に継続的に関わる。これら思考はいずれも、絵画表現固有の規範性に適切に応答し、人が画家へと成っていくこと、制度としての芸術へ積極的に参加し、他者へと自己の表現を開いていくことを可能にしているものであることが明らかにされる。

補論では、芸術制度に積極的に関わる鑑賞者の育成を目指す美術館教育プログラム「芸術作品を介したOBL（Object-Based-Learning）」が考察の対象となる。メルロ＝ポンティは芸術が社会で豊かに展開されるためには鑑賞者の役割が重要と考えていた。メルロ＝ポンティ自身はこの問題を詳述してはいないが、以上論じてきた彼の絵画論の枠組みを用いることで、この教育プログラムの中で鑑賞者が芸術作品の鑑賞を介してどのように知覚経験を変容させていくのかが考察される。

III 評価

本学位請求論文は、諸言語（フランス語、ドイツ語、英語、日本語）で書かれた最新の先行研究をふまえたうえで、メルロ＝ポンティ哲学を教育学的な視点から「芸術を介した人間形成論」として再構成することに成功していると高く評価できる。

第1部は、メルロ＝ポンティの表現論がドイツ人間形成論の理論構成と親和的であることをメルロ＝ポンティのドイツ観念論哲学受容の様相や現代ドイツ人間形成論への「逆輸入」状況の考察から明らかにしており、読み応えのある部分になっている。これまで教育学におけるメルロ＝ポンティ受容は学びの身体性を強調する文脈で部分的に受容されるにとどまっていたが、メルロ＝ポンティをドイツ観念論にまで遡って関係づけながら、単なる学習ではない、学習する主体自体の変容を身体レベルで論じた人間形成論の哲学者として特徴づけたことは本論文の大きな成果である。

第2部は、メルロ＝ポンティの絵画論を、文学や数学も包含する表現論という大きな枠組みのなかで位置づけ、絵画も制度として人に「～に応答すべきである」と要求するような「歴史的構造」ないしは「内的必然」性をもつことをテキストの内在的解釈によって明らかにしている。この点で、研究目的の「絵を見ること・描くことが人間の経験のしかたをいかに変容させるのか、その原理とはいかなるものなのか」という問いに答えていると言える。

しかし、公開審査会では、この考察で強調されているメルロ＝ポンティの絵画論や表現論を特徴づける「規範」や「歴史的構造」や「内的必然」という概念に対して、たしかにそれは一義的回答や影響を与えるものではないと述べられてはいるものの、「規定性」がかなり強調されている点に質問が寄せられた。このような特徴づけによって、「新しいもの」「独創的なもの」の出現、芸術の多様性、ないしは伝統からずれて新たな変容を遂げていく人間形成の様相をどのように説明できるのかという問題が提起されたのである。この質問に対して、指摘の重要性は理解できるが、これまでの芸術教育や美術教育の語り方が、子どもの想像力や創造性、自己表現を重視する論調に偏っていることを批判し、絵画制作における知的性格とそれに働く規範と規範の先鋭的遂行を強調したかったために、そのような論じ方になってしまったとの説明がなされた。

第3部と補論では、「メルロ＝ポンティのテキストから、彼が芸術家になっていく人間形成のあり方をどのように説明したのか／しうるのか示す」（p. 14）ことが行われ、第1部と第2部で明らかになったメルロ＝ポンティの「芸術を介した人間形成論」が、芸術家や鑑賞者の人間形成と教育を具体的に論じていたらどのようなになったかという問題に取り組んだチャレンジングな部分で、公開審査会でも、この第3部は魅力的な部分であったとの意見が寄せられた一方、ここで展開されている議論は専門家としての芸術家養成論なのか、それとも一般教育にも適用可能な論なのかという質問も提出された。これに対し、どちらの方向にも展開しうる基礎論的考察を行ったとの回答がなされた。その上で、現実の教育実践にこの基礎論を適用するには、さらに多くの問題を考える必要があることが述べられた。このやり取

りから、本学位請求論文の到達点と限界に非常に自覚的であることが確認された。

公開審査会においては、全体にわたる問題として以下のような質問も提出された。「人間形成論」としてメルロ＝ポンティの現象学的哲学を読みうることを確証し、特に中期と後期の芸術論を再構成する、という本論文の意図は、成功していると認められはするものの、立論が「人間形成論とは～である」という定義から出発し、従来の「人間形成論」に親和的かどうかを判定する論立てになっているため、「人間形成論」の枠に入らないメルロ＝ポンティ哲学の問題や、メルロ＝ポンティ哲学が旧来の「人間形成論」に新しく付与しうる側面の考察が十分ではないのではないか、という問題である。前者に対しては、本論文の構成上の必要性から生じた問題で本論文の独自性を担保するものであるが、同時に限界性ももつかもしれないとの回答がなされた。後者に関しては、現代のドイツ人間形成論に身体性の問題を導入したことが挙げられると述べられた。

さらに、メルロ＝ポンティのテキスト群をその問題関心の連続性に即して時期を超え等価的・相補的に扱うことの妥当性に関してや、第2部の考察対象とされている「間接的言語と沈黙の声」のテキスト解釈に関する問題、さらには、「総合なき弁証法」や「三重の取り上げ直し」といったメルロ＝ポンティ「人間形成論」の中核を成す概念の具体的内容の問題、論文全体に内在する形式陶冶論的方向性（絵画芸術が文学や数学と共通してもつ知的・学問的性質）と実質陶冶論的方向性（絵画芸術に固有な規範性）のジレンマ、言語表現と絵画表現との異同、補論で展開された OBL（Object Based Learning）実践での教師側の変容可能性の問題、美的人間形成論がもつ他者性・批判性の不在などについても議論が展開された。こうした議論に対して概ね説得力のある応答がなされた。

以上、公開審査会における議論を通じて、本学位請求論文の独自性とこれからの課題がより明瞭になったと言える。

IV 審査結果

メルロ＝ポンティの現象学的哲学を「芸術を介した人間形成論」として読み解こうとする意欲的なこの論文は、芸術教育を論じるときに必ず問題とせざるを得ない「芸術（制作と鑑賞）はどのように経験主体を変容させるのか」という根本問題に正面から答えようとし、高い水準で成功していると評価できる。仏独間での哲学的・教育学的影響関係も考察している点でもこれまでにない研究となっており、その将来性を期待させる。上記のような課題はあるものの、それらは根本的で深い考察が展開されているからこそ指摘できるものであり、今後の研究への大きな期待からくるものでもある。審査員一同は、本論文が課程博士号（教育学）を授与するに値するものと判断するものである。